大乗起信論における衆生心について

河野重雄

《大乗起信論》を理解する上で、〈衆生心〉という《起信論》中の概念を如何に考えたらよいのかを論じたいと思う。ところで、この〈衆生心〉という文字は真諦訳《起信論》（これを実叉難陀訳本に対して旧訳と称している）には、二ヵ所に見える。

一般には〈衆生心〉は「われわれ人間の持っている日常心のこと」であると理解されているし、《起信論》においては摩訶衍と一心と衆生心とは同義語であるとも考えられている。確かにこうした理解も当を得たものだと言うことは言えるであろうが、今一度綿密に起信論自体を読む必要がありそうである。その場合、テキストとして真諦訳を用いるか、実叉難陀訳を用いるかで多少理解の相違が生じてきそうである。新訳と旧訳とについて、一般に部分的な語句の顚倒、増補、縮少が多少見られるが、そうしたものを除外すれば、よく全体として一致しているとされる。しかしながら新訳と旧訳には、もしこの《起信論》がまさしく漢訳本であったとしたら、その翻訳上の態度には相違があったらしい形跡が見られる。例えば「摩訶衍と大乗」や六波羅蜜の名称に関する漢訳語と音訳語の問題がそれである。今はこれらの点を論じる余裕を持たないが、別の機会に発表したいと考えている。こうした問題点を持つ故に、この論文のテキストとしては真諦訳のみに限ったことを一言断っておきたい。

《大乗起信論》において〈衆生心〉が最初に見られる所は立義分である。立義分は《起信》一論の大綱を述べる所であって、ここで摩訶衍が論ぜられる。摩訶衍は《起信論》の中心概念であって真如と同義語である。立義分では最初に摩訶衍を説明するのに〈法〉と〈義〉の二つの面があることを明している。この〈法〉の面はまた〈衆生心〉と言い換えることもできる。続いて「是心則摂一切世間出世間法。依於此心顕示摩訶衍」といい、この心（衆生心）によって摩訶衍の義が顕示されるという。通常仏教の論書では法と義とを車の両輪の如くに考え、この両輪をもって仏教学上の概念を一つ一つ説明してゆく。ここでは摩訶衍が〈法〉と〈義〉の二つに分たれるのであるが、〈法〉の面は〈衆生心〉と換言することによって、義を顕示できると言っている。このことは摩訶衍を説明する場合、二つの説明の仕方が可能であることを表わしていると考えてよい。一つは〈法〉といわれる面であり、他は〈義〉と言われる面である。そしてこの〈法〉の面は新しく〈衆生心〉という概念を導入し換言することによって、義を顕示できるとするのである。このことは〈法〉の面に〈衆生心〉が導入されることによって、摩訶衍を独自の立場で説明できることを意味している。すると摩訶衍の〈義〉の面は〈法〉の面と両輪をなすのではなく、独自の両輪を持ったものと理解する方がよいのではないだろうか。他方〈義〉の面には法にあたるものが一見ないように思える。ここで、この法にあたるのが摩訶衍自体ではなかったかと推測されるのである。そして〈義〉の面における独自な摩訶衍の説明は、体相用三大という特質を挙げる

ことによつてなされていることになり、〈義〉の面に見られる摩訶衍の説明は絶句的なものとなるのである。即ち摩訶衍とは体相用三大という特質を持つたものと言い得るのみであつて、それ以上の追求は許されないのである。このことから、〈法〉の面は論理的追求をまだ許してくれる可能性を残しているが、〈義〉の面はそれを許さないのであり、摩訶衍自体の説明はこの二つの方向から考えられたのである。この点は解釈分を見ることによつて、より明確になる。解釈分に入る前に今少し立義分を見よう。〈法〉の面は〈衆生心〉という概念を入れることによつて摩訶衍の義を顕示できるという、その理由を「何以故。是心真如相即示摩訶衍体故。是心生滅因縁相能示摩訶衍自体相用故」と述べている。「何以故」とは、なぜならばという理由を明す語句である。それ故に次に「是心」とある心は〈衆生心〉の意味だと考えなくてはならない。〈衆生心〉に心真如相と心生滅因縁相の二様の理解面が含まれているのである。心真如相は摩訶衍の体を、心生滅因縁相は摩訶衍自体の相と用を明すのであり、これは〈義〉の面の三大と対応する。この〈衆生心〉の二様の理解面が、次の解釈分顕示正義段の全文を費して説明されている。即ち顕示正義段の最初に「依一心法有二種門。云何為二。一者心真如門。二者心生滅門。」とあり、続いて「心真如者……」と言い「復次真如者……」と説き、同じ説明形式で「心生滅者……」といい「復次生滅因縁者……」と説き進んでゆくのである。この説明は明らかに立義分の「是心真如即示摩訶衍体故。是心生滅因縁相能示摩訶衍自体相用故」の一句を前提としたものであることは承認できると思う。すると顕示正義段初めの「依一心法有二種門」の〈一心法〉は〈衆生心〉を指すと見るべきであることになる。するとこの三文字は如何に読み解されるべきだろうか。《起信論》において一心は明らかに真如である。これは顕示正義段に、真如の心性を説明するところで「唯是一心。故名真如」とある故である。一心は真如であり、〈一心法〉が衆生心であるとするならこの〈一心法〉の〈法〉は、立義分に言う摩訶衍を二つに分つた時の〈法〉の意味でなければならない。故にこの三文字は〈一心を理解する上での法の面に〉という意味で〈一心の法〉と読まれるべきだと思う。

〈衆生心〉は分別発趣道相段の終りの方にもう一度見える。即ち「衆生心者猶如於鏡。鏡若有垢色像不現。如是衆生心若有垢法身不現故」である。法身は真如である。衆生心に垢が有れば法身が現じないという時の〈衆生心〉は「猶如於鏡」といわれる。立義分の「依於此心顕示摩訶衍義」を念頭に置く時、「於」の文字が気になる。この文字には多くの義があるが、内に「おける。おいてする。ここにおいて」等の意味が見られる。鏡に喩えられる〈衆生心〉に「おける。おいてする。ここにおいて」とは、衆生心というその当処においてという意味に取ることはできないだろうか。鏡そのものではなく、鏡があるその当処において起ることを強く思考していないか。鏡そのものという実体は真如であろうが、その鏡に「おいて」何かが起るその当処は鏡そのものより、もつと動的なものを指しているように思える。即ち〈衆生心〉は真如と異なつたものでもなく、真如と全同なものでもない。真如の当処において動的なものが認められる、そんな場所とも働きとも的確には表現し得ない所、それが〈衆生心〉ではないだろうか。〈衆生心〉は真如海の動きを把える鍵であり、一つ一つの波たる我々が真如海に還源できる契機とされるものだろう。（註略）